

## 鹿児島の動物40

## 種子島の動物

種子島は過去に九州本土と陸続きだった時代があるため、陸上動物は県本土と共通のものがほとんどです。しかし、約1万2000年前に大隅海峡ができて九州本土と隔離された後、動物たちに何がおこったのでしょうか。



マゲシカ（西之表市の飼育施設にて）

種子島に生息するニホンジカは、固有亜種のマゲシカです。ミトコンドリア DNA の塩基配列を比較した結果、種子島と馬毛島のマゲシカは、九州本土のキュウシュウジカや屋久島のヤクシカとは異なっていることが判っています。ニホンイタチもまた、種子島と屋久島の集団は固有亜種のコイタチとされ、九州本土のものとは区別されています。鳥類ではタネアオゲラやタネコマドリなどが、やはり種子島・屋久島の亜種とされています。このように、同一種であっても、亜種のレベルで他の地域との違いが認められている動物が多いことが、種子島の動物の特徴の一つです。

今も残る動物ばかりではなく、種子島ではこれまでに姿を消してしまった動物もいます。島内の縄文時代の遺跡からはイノシシやニホンザルの骨が見つっていますが、ともに現在の種子島には生息していません。消滅した理由としては、イノシシの場合は人間による捕獲が最大の原因になったと考えられます。事実、大正初期まではわな猟でさかんに捕獲されていたそうです。ニホンザルは1960年代になくなったようですが、当時活発に行われた森林伐採による自然林の減少が、最大の原因ではないかといわれています。種子島にいたタヌキも大正時代には目撃や捕獲の情報がありますが、その後いつどのような理由で消滅したのか、詳しくは判っていません。両生類では、アカハライモリが島内各地の水

動物担当 池 俊人

田などに生息していましたが、1960年頃に消滅しています。これらの種子島から消滅した動物が、屋久島や県本土と比べて違いがあったのかなど、もはや調べることができないのは非常に残念なことです。

反対に、県本土と共通の動物でも、種子島では非常に豊富に見られる場合もあります。ニホンヒキガエルは種子島では「イボバック」と呼ばれますが、夜間に路上や街灯の近くで昆虫を待ち受けている姿がよく見られます。トノサマガエルも県本土では個体数が非常に少なくなって姿を見ることは稀ですが、種子島では珍しい存在ではありません。ニホンイシガメも島内の川や池には非常に多く生息しています。県本土では外来種のミシシッ

ニホンヒキガエル  
（西之表市西之表）トノサマガエル  
（南種子町平山）川底のニホンイシガメ  
（西之表市伊関）

ピアカミミガメが大繁殖したり、クサガメとの間に交雑が起こったりすることが大きな問題となっているのです。これら3種の動物は、個体数が減少したことで県レッドリストの「準絶滅危惧」に選定されましたが、種子島には今も豊富に生息しています。

以上のように、九州本土と隔離された後の種子島の動物たちは、独自の変化をして固有亜種になったり、消滅してしまったり、今も安定して生息し続けたりと、様々な運命をたどることになったのです。